安全力の育成
～ケガを繰り返すAちゃん～

保育園での生活も長いAちゃん。しかし、なぜAちゃんだけが繰り返し転んだりケガをしたりするのか？

度重なるケガを職員は疑問に思い、また保護者の方も保育園生活がどうなのかと不信感を抱き始めていました。

いったいケガの原因は何なのか？

”ケガを未然に防ぎ、Aちゃん自身の安全力を高めたい“と全職員で願いをもち、保育園側とAちゃん自身に考えられる要因を考察し、改善に取り組みました。

原因は何なのか？

保育園側

○危険を予測する力不足。

○日常の環境構成が整っていない。

○安全配慮に対しての意識が低い。

Aちゃん自身

○朝起きれないのか、登園が遅く、午前中は元気がない。

○友だちとの関係が上手くいかず、トラブルになることがある。

○注意力に欠け、散漫になることがある。

春 力をつけるために

Aちゃん自身の安全力を高めるために、3点をポイントに取り組むこととしました。（※図）

ケース会議では次の3つの課題があがりました。

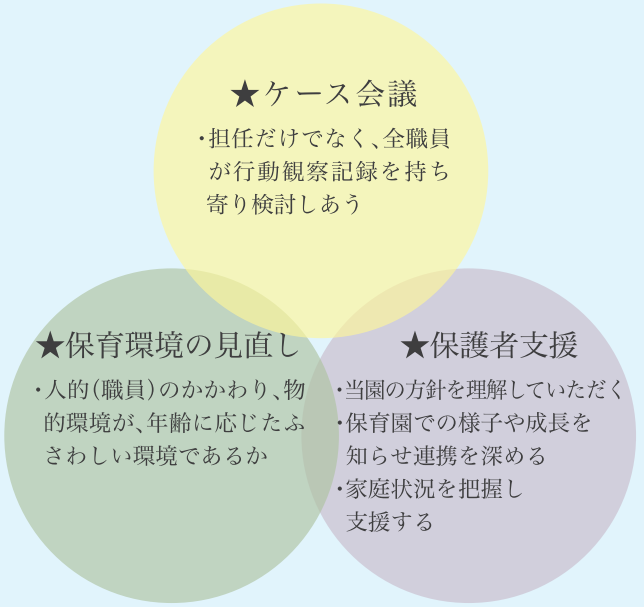
①危険を予測したうえで遊びの環境と人的環境を整えていくべき。

②注意力や周りを見る力が育つよう、鬼ごっこやチャンバラ遊びを多く取り入れてはどうか。

③危険な行動がみられたときは行動のあとの結果がどうなるかについて話し合い、子ども自らが危険に気づけるようにしていこう。

この課題に対し、毎月検討を重ね合い、実践に向けていきました。

安全力育成のための３つのポイント（※図）



保育士の葛藤

Aちゃんを継続してみていく中で「Aちゃんに力をつけたい」という思いがある。しかし「ケガをさせたくない」という思いの方が強くなり、保育士の皆が危険面ばかりに目がいき、行動をすぐに制止したり注意したりすることが増えてきた。「Aちゃん＝危険な子」の固定概念を抱いてしまっていては信頼関係ができず、保育士の言葉にも耳を傾けてくれない。

Aちゃんの良い姿を確実にとらえ、認め、皆の前で褒めることを増やしていこう。そうすることで保育士や友だちとの関係も深まり、Aちゃんの力にもつながるのではないか。

夏 Aちゃんの転機

保護者の方に保育園でのAちゃんの姿を知らせ、登園を早めていただくよう伝えました。ラジオ体操に参加するようになったこともあり登園が早くなり、活発な姿や友だちとの関係も深まっていきました。

園庭の固定遊具には興味が薄く、遊んでもすぐに飽きて転々としていたAちゃんでしたが、ある日登り棒で、友だちが滑り落ちても何度も挑戦する姿をじっと見て「Aもできるよ」と挑戦し、みるみる内に中間地点まで登ることができました。「Aちゃん凄い。登るの早い！」と保育士や友だちも感動しました。「できるよ。簡単だよ」と得意気なAちゃん。登り棒に成功したこと、皆の前で褒められたことが自信となり、意欲的に繰り返し挑戦するようになりました。このことがAちゃんの転機になったようで、さまざまな運動遊びに取り組むようになりました。

登り棒の競争をする子どもたち

秋 Aちゃんの実り

鬼ごっこやチャンバラ遊びを意図的に取り入れ、楽しむ中でときにケガにつながったこともありました。しかし、その体験からも多くの学びがあり、体験を通して機敏な身のこなしや注意力が身についていき、ぶつかることもずいぶん減っていきました。また廊下を走ったり、赤ちゃんのそばで玩具を振り回すなど、危険行動が見られたときは、すぐに声かけを行っていったり、起こりうるケガを子どもたちと話し合ったりしたことで、自らが危険に気づいてやめることも出てきました。

また保護者の方にはその都度、保育園での様子や出来事に関して伝えていったところ「少しのケガは必要ですね。多くの体験を通して学んでいってほしいです」と意識の変化もみられるようになりました。

全職員が「Aちゃんに力をつけたい」と願いをもち、かかわってきたことがAちゃんの成長と一致し、危険を察知する力につながり出しました。

子どもは、これから多くの体験を通して、ときにはケガをしながら、さらに安全力を伸ばしていきます。子どもたちの将来を見据え、子ども自身が心と体で安全力を身につけていけるような環境を整えていくことが必要だと実感しました。

廊下をスピードをつけて走るAちゃん
～保育士とAちゃんのやりとり～

「Aちゃん廊下はどうやって行くの？」
『歩く！』

「なんで歩くの？」
『ん～…ぶつかるで？』

「走るとどうしてぶつかるのかな？」
『ん～…危ないから？』

「すぐ止まれないとぶつかって危ないね。ぶつかるとどうなる？」
『ケガする！』

「ぶつからないためにはどうするといい？」
『歩く！』

自らが危険に気づけるような声かけで再確認！

みんなの広場

毎月1回、習字の先生を招き、5歳児が平仮名のきれいな書き方や書き順、毛筆を習っています。

一人ひとり丁寧に教えてくださいます

〈宮川定幸先生から〉

子どもたちに字を教えていると、いつも無邪気に笑顔で答えてくれます。無心に取り組む姿に接し、かつて教職であった若いころの自分を思い出し、こちらが学ばせてもらう次第です。今後も、頑張り屋の子どもたちのわずかでも手助けになればなーと思いつつの日々…

宮川先生の作品（墨絵）